モネ《カピュシーヌ大通り》 「現在」を描く・描くことの「現在」

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>六人部 昭典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前大学人文科学部論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>1-14</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2004</td>
</tr>
<tr>
<td>版</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
モネ
《カピュシヌヌ大通り》

「現在」を描く／描くことの「現在」

六人部
昭典

要旨
クロード・モネが一八七三年に制作した《カピュシヌヌ大通り》は、翌年に関かれたいわゆる「第一回印象派画家」に出品された。本作品はパリ大改造によって生まれ変わるものであり、モネの特徴である都市の様相すなわち「現在」を描いたものであり、モネの消えやすさや移ろいやさを描いたのだろう。『現在』を描くこと、即ち筆触表現は大掛かな表現である。モネは筆触によって、モネの消えやすさや移ろいやさを描いたのだろう。この言葉はモネの絵画について「現在」に関連する言葉が使われた最初の例である。これは「現在の表現」という絵画の新しい方法を画家に求めさせたのであったから、この言葉はモネの絵画について「現在」を描くことを、「現在」を描くことは、それがたびたびの筆触表現を示して、見るものを、それがあたした筆触表現を示すものであり、特に都市の物質的な側面をあらわす。「現在」を描くことは、それがたびたびの筆触表現を示して、見るものを、それがあたした筆触表現を示すものであり、特に都市の物質的な側面をあらわす。
クロー・モネ 《カピュシーヌ大通り》 1873年
カンヴァス／油彩 61×81cm モスクワ／プーシキン美術館

この作品は、印象派の代表作として知られている。モネがこの時期に描いたのは、パリのコンセルヴァトワール地区の大通りを題材にした作品である。

《カピュシーヌ大通り》は、モネがパリの中心部を題材にした最初の作品であり、印象派の発展を反映している。モネのスタイルは、光の変化と色彩の効果に注目し、自然を忠実に表現することを目指していた。

この作品は、モネの生涯で最もよく知られた作品の一つであり、印象派の発展を反映している。モネのスタイルは、光の変化と色彩の効果に注目し、自然を忠実に表現することを目指していた。

この作品は、モネの生涯で最もよく知られた作品の一つであり、印象派の発展を反映している。モネのスタイルは、光の変化と色彩の効果に注目し、自然を忠実に表現することを目指していた。
「現在」を描く

モネ（カピューシュヌ大通り）  1873年
カンヴァス／油彩  80 × 60 cm
カンサス・シチ／ネルソン＝アトキンズ美術館

「現在」を描くという、絵画について「瞬間」に関連する語が用いられた最初の例だと考えられる。「現在」を描くことは、瞬間のフォルムにどのような変化をもたらしたか、当時の批評が用いた瞬間なるものをとそう考えることができるだろうか。また、この主題は絵画のフォルムにどのような変化をもたらしたか、この絵画の「現在」という言葉を手がかりに、「カピューシュヌ大通り」の特質と時代との関わりを考えたい。

また、モネが一八七三年にカピューシュヌ大通りを描いた絵は二点現存するからである。一点はモスクワのプーシキン美術館所蔵、もう一点はアメリカのネルソン＝アトキンズ美術館に所蔵されている（図2）。いずれの作品も大通りを斜めに捉えた構図だが、前者は緑の色調の強い光を受ける画面左部分に、後者は緑の色調を受ける左の影の部分に強いコントラストをもっている。一方、後者は緑の色調を受ける右の影の部分を強くコントラストをもっている。全体が緑の色調でまとめられ、大通りを
MOKET (Claude)
A Argentuil (Sainte-Oule)

93. Coquelicots.
96. Le Havre : Bateaux de pêche sortant du port.
97. Boulevard des Capucines.
98. Impression, Soleil levant.
99. Deux croquis.
    Pastel.
100. Deux croquis.
    Pastel.
101. Deux croquis.
    Pastel.
102. Un croquis.
    Pastel.
103. Déjeuner.

Mademoiselle MORISOT (Berthe)
7, rue Gutirard, Pavy-Paris

104. Le Berceau.
105. La Lecture.
    Appartement M. Morisot.

図3 「第1回印象派展」カタログ

人文科学部論集 第5号
うにある。この無数の黒い液は何を描いたもののか、教えてくれぬか。

「あれば通りを散歩している人たちですよ」と答えた。

それが、ワシがカピュッシュヌ大通りを歩いているとき、あれに似ているというのか……。

「でらない、ヴアンサン先生……」

「だが、これらの黒い液は、噴水の花崗岩に塗краすにつけるのと同じやったりじゃないか。

・前代未聞だ、恐ろしい！

は、マラドニ大通りを描いた筆触。彼は、これらの黒い液は、ブラル通りと呼ぶ。について、「この無数の黒い液は、インモーマブレ（immobile）と記している。群衆を筆触で描き出すという特徴は、二点の（カピュッシュヌ大通り）のいずれにも見られるが、ブラル通りが難しいのを断定するのは、ブラル通りの絵画を一層提案されるべきである。次にモチーフとなったカピュッシュヌ大通りを検討しよう。すでに触れたように、カピュッシュヌ大通りの二階大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュッシュヌ大通り、ガルニエ設計のオペラ座近くに位置し、今も同じ名前で呼ばれている。の画通は、聖マドレーヌ教会から一直線に伸びる通りは、東に向かい立つが、マドレーヌ通り、カピュシュ
この通りでは、たとえばルイ・ヴィトンがすでに一八四四年にオベリスクを受け取り、オペラ座に四番地に店を開いている。これが表現の表現である。「現代生活の画家」の中で次のような述べている。『私が今日、もっとも論じようと思うのは、現在の風俗を描いた絵である。』これ、現在の表現『La représentation contemporaine』と呼ばれるものを、偶然ながらも、偶然的なものですので、たとえ、人間にした大妙を、綾羅に旅するものの孤独者は、単なる遊歩者よりも、高貴な目的、その場限りの快楽とは異なる、つまり、モネは、現代生活の画家を発表した年には、マネの「草上の昼食」の計画に取り組んだ。彼は、印象派の形成の形成に踏み出したことは今日、広く知られているが、残された書簡等にポードレールの言及が確認できないので、当時のモネが詩人の文章に対してのような示唆を得ていたかは明らかではない。残された書簡等にポードレールの言及が確認できないので、当時のモネが詩人の文章に対してのような示唆を得ていたかは、明らかではない。
モネは《カピッシュヌ大通り》を制作する以前にも、パリの街を
仰瞰した（もしくは一画を見下ろした）作品を描いている。たとえ
ならば、一八六七年にはルーヴル宮の南東の階からの眺望を描いた三点
の作品が確認できる。そのうちの一点、《ルーヴル河岸通り》（図
4）は画面手前に通りとそこを行き来する人々や馬車の姿が描かれ、
セーヌ河と街並みの向こうにパレオを遠望する構図を示してい
る。この絵と《カピッシュヌ大通り》を比較すると、いずれもパリ
の通りを題名にもつ作品でなく、後者は空を大きくとったパノラマ的な構図であ
るにあたり、前者が空を占める部分が少ない（カピッシュヌ美術館所蔵）
作品に顕著に認められる。そして後者の作品には前者が見られな
い一つの要素が認められる。ひとつは画面右端には前者が見られ
ない下ろすシルクハットの人物、もうひとつはルーヴルの屋上から
とられた群衆の筆触表現である（これらの特徴は《二のキ》《カピッシュ
ヌ大通り》のいずれにも見ることができる。この作品はまず右端的人物を検討しよう。二人の人物は画面の端で

図4 クロード・モネ 《ルーヴル河岸通り》 1867年
カンヴァス／油彩 65×92 cm ハーグ市美術館

（7）
その家はアムステルダム通りに入りた右側のはずれの高い建物で、西部鉄道が何人かの職員を住ませていた。窓は六階のどかにな
ったマンサルド風の屋根の隅にあり、サンターラール駅やヨーロッパ橋界隈を、ここから高める鉄道の切通しを眺める。

三

筆触表現

モネの『キュピュシヌ大通り』にに戻り、この作品のもうひとつの特徴である筆触表現を示唆しよう。ルノワは筆触表現を、
数々の例ではなく絵の具の削りかすの混ざり合ったもの、多数の黒い,

モネは一八六七年の『ルーヴル河岸通路』では、散歩する人物たちを追いかけた。今日は、近づく

モネが確に指摘したように、筆触表現が、現存する両の対象であることを示唆している。ポートレールは後に示された

の後半部で、筆触表現が写実主義、非実的、両方を対象であることを示唆している。ポートレールは後に示された

（9）
在の表現を見て私たちがあしらう歎びは、現在が身にまとうことのできる美から生まれるだけではなく、現在の本質的な特性からも生まれる」と述べていた。ポードレールの文章に基づいていえば、モネは「ル＝ヴル河岸通り」では、主に「現在が身にまとうことのできる美を再現することを通して「現在」を描いたのだった。「流の衣装はやすきや移ろいやすき、偶然的なものであることを通して、「現在」が描かれているのである。

シェノの文章には「運動の瞬間なるもの」(Instant)という語が認められるが、初めに触れたように、これはモネの絵画について「瞬間Instant」と関連する語が用いられる最初の例である。この「運動の瞬間なるもの」という語は「瞬間によるもの」として、シェノが述べたとおり、大通りが都会を貫き、鉄道が都会を結ぶことによると、人々や物資、商品などの移動。流通が飛躍的に伸びた時代の繁华をもたらしたからである。モネが八七七年の第三回印象派展に出品したサン＝ラザール駅を描いた絵（図5）について、ソラは「人々はここになだれ込む列車のうなりを聞き、広大な

図5 クロード・モネ（サン＝ラザール駅）1877年
カンヴァス／油彩 75×100cm パリ／オルセー美術館
車庫のもとに湧き溢れる煙を見るだろう」と記し、「こんなにも美しい広がりをもつ現代の作品、ここにこそ今日の絵画がある」と賞賛した。当時の人々は、大通りの活気や列車の湧巻く煙に時代のダイナミズムを見いだしていたのである。

小説「人間」では、1926年に発表されたものの「瞬間なるもの」という語は時間に関わる。先のソラの小説「人間」では、サール・シュノフが用いた「タイムスリップ」の意味を模索される。印象主義絵画と写真の関わりについてはいくつかの言及が見られるが、代表的な例としてシュノフの見解を挙げることができる。彼は「芸術と写真」の中で、「カビュシ

図 8 アーロン・シャープ「芸術と写真」掲載図版
結びにかえて——描くことの現在——

モネは『カミーユス・大通り』において、現在の本質的な特性を通して、現在を描こうとしたのだが、彼がボードレールのモーリシオの主張を踏まえていたことは明らかだろう。ジェノーは、運動の瞬間であるの『「瞬間的な連続」』と述べたのだが、彼がボードレールのモーリシオの主張を踏まえていったことは明らかだろう。

『カミーユス・大通り』の視点を描く表現を「無数の黒い点」と絵を描いたルノワールが、筆を、「これらの斑点」（les points）と呼んでいた。「斑点」は、モネたちの街の眺望を愛し、渦んだ空を背景に、家並みが作る灰色や白い斑点を『絵画のフォルム』を大きく変えることになった。最後に、この作品について、さらに検討したいと思う。

ソノーノ、モネは私たちの街の眺望を愛し、渦んだ空を背景に、家並みが作る灰色や白い斑点を絵画のフォルムを大きく変えることになった。最後に、この作品について、さらに検討したいと思う。

モネは私たちの街の眺望を愛し、渦んだ空を背景に、家並み作る灰色や白い斑点を絵画のフォルムを大きく変えることになった。最後に、この作品について、さらに検討したいと思う。

（12）